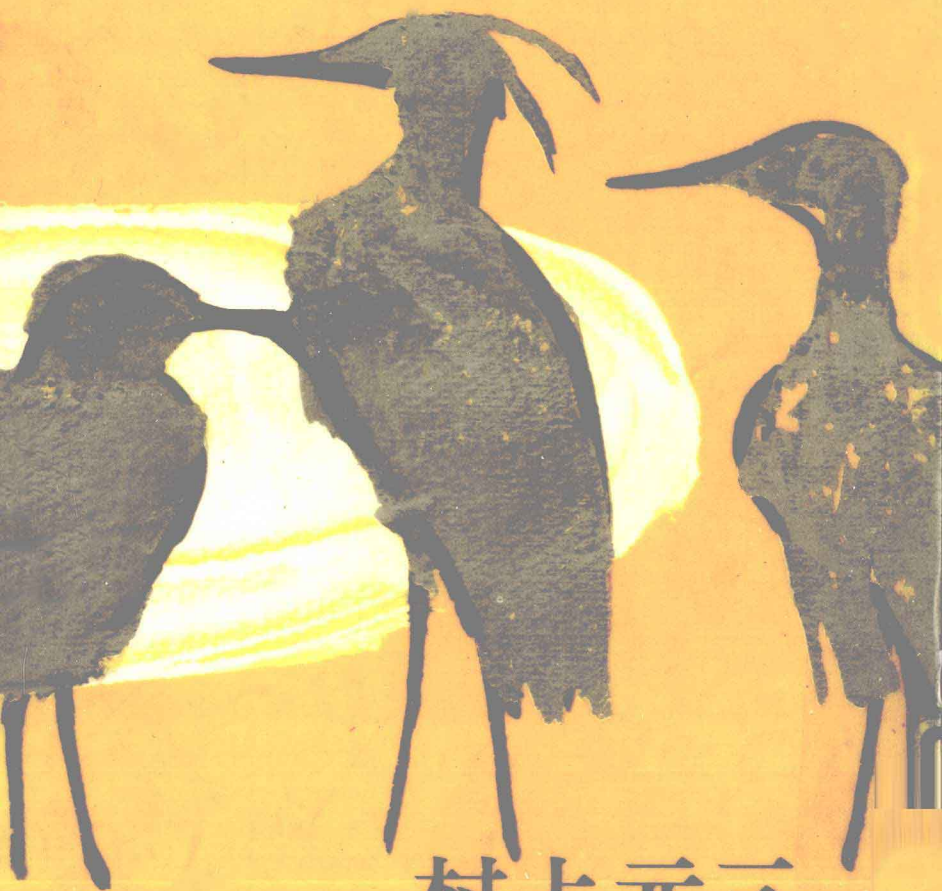


源義經

第一卷



村上元三

村上元三

源
義
經

第一卷

朝日新聞社

源義経 第一卷

定価 三三〇円

著者 村上元三

昭和四十年十二月十日発行

発行者 朝日新聞社 足田輝一

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

東京
名古屋
大阪
九州

第一卷 目次

鞍馬の火祭	三
僧正ヶ谷	二四
武藏坊弁慶	四七
法師問答	六六
菊のまくら	九〇
一あって二なし	一二三
能登守教経	一三〇
白女黒男	一五三

雪 念 仏……………二六

紅 白 合 戦……………一九

初 東 風……………三六

悲 母 觀 音……………三三

五 条 橋……………三七

雲 珠 桜……………三五

名 残 の 鐘……………三〇

装 幀 橋本明治

挿 画 木下二介

源

義

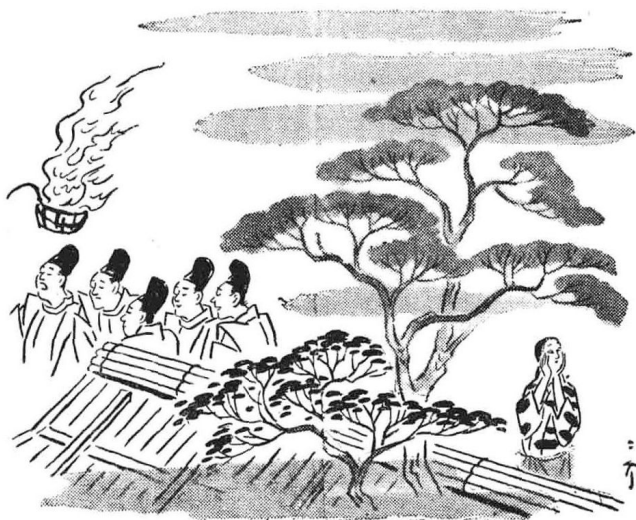
經

村

上

元

三



鞍馬の火祭

「毎年この夜はな、鞍馬の天狗どのたちは、お山がそうぞうしいので、向いの龍王ヶ嶽の頂きに舞いあがり、火祭をながめおろしながら、酒くみ交すのだ。だから、天狗どのの羽音を聞きたいと思うたら、今夜、こっそりと龍王ヶ嶽へあがってみるがいい。高い高い杉の頂きあたりから、ばたばたと羽音にまじって、田楽でんがくを舞う気配が聞えるわ」

二三軒さきの、やはりこの鞍馬村で同

じ大総仲間をつとめる家の前から、七郎次の大きな声が聞える。

下戸の七郎次が、今夜は少しばかり祝い酒をのんで、いい心持になっているらしい。神輿迎えの時刻が近いので、松明の用意をしている白衣すがたの若者たちに、七郎次は話をして聞かせていたのであった。

うつぼは、わが家の軒下から少しはなれたところに立って、その話を聞きながら、自分も楽しくなり、ひとりでにこにこ笑っていた。

養い親の七郎次の機嫌がいいと、うつぼも、やはりうれしくなってしまう。ことに今夜は、もう直き神輿迎えにお山へあがらなくてはならないので、うつぼも新しい小袖を着て、きれいに化粧をしているせいか、自分でもよけいに気が浮き立っていた。

「おやじどのは、天狗の姿を見たことがおありか」

若い者のひとりが、からかうように聞くと、七郎次は、わざと怒った声になった。

「無論のことだ。若いころのわしは、お山の僧正ヶ谷で、一夜じゅう、天狗どのたちと酒をくみ交したことが何度もある」

九月九日の鞍馬の火祭の晩だけは、お山の天狗たちが龍王ヶ嶽へ移って田楽能を舞っているとか、お山の天狗とは心安い、というような七郎次の話は、若い者たちも聞きあきているし、七郎次もそれを承知で話をしているのであった。

「うつぼどの」

赤松の根を竹で茶筌ちやせんのような形に編み、藤蔓でからげた一丈ほどの大松明をかついだ若い者がひとり、うつぼの前をかけて行きながら、

「ひょっとすると、そなた、今夜は、牛若どのに会えるかも知れぬ。せいせい美しくして行くがいいぞ」

振返って、あははは、と笑って走り去った。

「まあ」

急に顔が熱くなって、うつぼは、頬を両手でおさえた。

うつぼは、十四であった。

一村ごとく鞍馬寺の支配をうけるこの村の、大総仲間での総代、七郎次に、二つの年から養われている。

丸顔で、眼の大きい、白い桃のような肌をした娘で、お山の荒法師たちでさえ、吉祥天女のような、といった。

頬を押えた手のあいだから、うつぼは、頭上にのしかかる鞍馬の山を、盗み見するように、そっと仰いだ。

星もない秋空の下に、黒く見えるあのお山の中腹あたり、高い杉木立にかこまれた東光坊とうこうぼうのなかにいる人の顔と姿が、うつぼの眼一ぱいに映る。

「うつぼ」

うつぼは、ぼんやりしていた。

「うつぼ」

二度目に呼ばれた低い男の声に、うつぼは我に返った。

「はい」

あたりを見たが、いそがしくわが家へ出入りしている人、火祭の支度をしている者などの姿が、村の道のまん中で燃える大きな篝火の光に浮き出て見えるきり、だれが自分を呼んだのか、すぐにはわからなかった。

「ここだ、ここだ」

また低い男の声が、うしろから聞える。

ふり返って、そつとのぞいてみると、わが家と隣家とのあいだの、鞍馬川の岸へ出る細い小路に立って、手まねきしている者がある。家が火の明りをさえ切っているので、その姿もよくは見えない。

「どなた」

「おれだ、わからぬか」

「え」

「四条の正門坊」

「あっ、兄様か」

びっくりして、急におそろしくなり、うつぼは背を向けて逃げ出そうとした。

「待ってくれ、うつぼ」

追いつがってきて正門坊は、うつぼの袖をつかんだ。

「頼みたいことがある、手間はとらせぬ、こっちへ来てくれ」

「お放しなされませ。人に見つかる」と

「わかつている。村の奴らや山の法師どもに顔見られたら、追い払われるときまったおれだ。」

頼む、妹、話を聞いてくれ」

「放さぬと声を立てます」

「今夜のおれは、錢をねだったりはせぬ。大事な話だ。遮那王しやなに用のある人々を連れてきた」

「えっ、牛若さまに」

思わずふり向いたうつぼを、すかさず正門坊は抱きかかえるようにして、その暗い小路へ連れこんだ。

あがこうとしたが、身体の大きな、力つよい正門坊につかまっては、十四のうつぼは赤子のように扱われた。

「さあ、ここなら人にも見つからぬ」

と正門坊は、家の土壁にうつぼを押しつけるようにして、早口にささやいた。吐く息が、ぶうんと酒くさい。

「人を五人ほど連れてきた。今夜の火祭を幸い、なんとか山へあがる手引きをしてくれ」

正門坊は、篠懸すさかけを着た修験者のなりで、頭巾とくしんを深くかぶっている。腰に太刀を横たえているのが、暗いなかでもわかる。

その太刀の柄頭が自分の身体にさわり、ふっとうつぼに訳のわからない不安を感じさせた。

「お山へのぼるのに、わたくしの手引きなどは要りますまいに」

「そうは行かぬから、お前に頼むのだ。おれは一度、鞍馬山から追い出された身、しかも今夜は、人目を忍んで遮那王どのに会わねばならぬ」

「また、よくないことを」

うつばは、怒った声になった。

兄とはいっても、うつばより十五も年上であり、子供のころからいっしょに暮したこともなく、縁のうすい正門坊だけに、情愛も感じられない兄であった。

京の四条室町の御堂に住み、自分では四条の聖ひょうなどと称しているが、頭を丸めて僧形でいるというだけの、すり法師にしかすぎず、経文を読んで行い澄ますよりも、怪しげな祈禱をして銭を集めたり、正体の知れぬ古い仏像をかつき出して人さわがせをやる、というようなことばかりしているので、どこでも評判はよくない。

「今夜はべつだ。聞いてくれ、妹。おれと同じ、源氏にゆかりの人々を連れ、遮那王どのに会いに来たのだ」

「源氏にゆかりの」

聞き返してうつばは、小路の奥のほうをそつとのぞいた。

人の姿が五つほど、黒く固まって見える。暗いのでよくはわからぬが、さまざまな身なりをした男たちらしい。太刀を横たえている者があると見え、がちやりと金具が鳴った。

おそろしくなり、うつばは身体が震えた。

「牛若さまに、なんの御用」

その細い肩を、正門坊は両手で押えてささやいた。

「今夜のおれは、四条の正門坊ではない。俗世にあったところと同じ、左馬頭義朝どのがおん乳母の子、鎌田の次郎正清が一子、三郎正近のむかしに返って、源氏のおん曹司どうしに御意得たいのだ」

「そ、それでは」

けんめいに肩を振り、うつぼは兄の手を払いのけて、

「また牛若さまをそのかして、わるいことを」

「そうではない。よく聞け。源氏にゆかりの人々が、ただ、遮那王どのへ」

「いいえ、聞きませぬ。兄様は前にも一度、牛若さまをそのかし、お山から連れ出そうとなされた」

「あの時は、おれは遮那王どのに、源氏の系図を語って聞かせ、いまの平家がおごり高ぶっている世の有様を、」

「兄様は悪いお人」

「大きな声を出すな」

「京へお帰り下さい、早く」

「おれを怒らせると、この家へ火をつけてやるぞ」

と正門坊がうつぼをにらみつけたとき、

「正門坊、正門坊」

ひとり、太刀を鳴らして近づいてきた。

「それではまずい。おれに任せろ」

暗いのでよくはわからないが、それは侍烏帽子をいただき、黒っぽい直垂ひただれに太刀を横たえた武士だった。

うつぼは逃げようとしたが、すばやく正門坊が横へまわって立ちふさがった。

声も出せず、壁に背をつけて、うつぼは立ちすくんだ。

「正門坊のかけ合いふりでは、妹御が腹を立てるのも無理はない」

とその武士は、笑いをふくんだ声で、

「うつぼどのと申されたな。おれは源氏の流れをくむ、紀伊の国新宮の十郎義盛が一族、源次正綱。ほかの四人とも、それぞれ源氏にゆかりの者。今夜は遮那王どのお目にかかり、ご挨拶を申したい、というだけの事。人目をしのぶのは、平家をはばかつての用心。そなたにも迷惑はかけぬし、遮那王どのの不為となるような真似もせぬ。源氏のおん曹司、お健やかに成人なされているのを眼のあたり拝し奉る事が出来たら、それでよいのだ。そのためだけに、はるばる遠国から参った者もいる。どうぞ頼む、娘御どの、手引きしてくれ」

源次正綱という侍は、なめらかな口調で一息にしゃべり、うつぼへ頭まで下げた。

こうなると、世間知らずのうつぼには、どうしていいのかわからず、兄の正門坊に頼まれたのとは違って、対手を気の毒な、という気持が動いた。

「遠い国から参られたお方も、おいででございますか」

うっかりいったうつぼへ、源次正綱はすぐに食いさがってきて、

「さよう、おれと同じ熊野から参ったものが、もう一人。そのほかは河内、四国、中国、それに九州からのぼってきた者もいる。みな遮那王どのお姿を見れば、安心して国へ立帰り、源氏にゆかりの人々へ土産ばなしにしたい所存」

という、二問ほどはなれたところに固まっていた四人のなかから、ひとりが進み出てきた。夜目によくわからぬながら、貧しげな姿をした若者であった。

「正門坊の妹御どの」

とその若者は、熱意のこもった語調で、

「わたくしは、熊野の山奥に住む喜三太と申す者。もともとわが家は、源氏が譜代の侍でござる。牛若どのお姿を、この眼で仰ぎ見るだけで本望。そのさきの望みはござりませぬ。お願い申す、一目、牛若どのお会わせ下され」

声が震えたかと思うと、その喜三太という若者は、拳を眼にあてて泣いていたのであった。うつぼは心を動かされた。兄とは違ってほかの五人は、平家の眼を忍び、ただ牛若丸に会うことさえかなえば本望、といっている。それなら、手引きしてあげても、牛若さまにご迷惑はかかるまい、という心持になりかけた。

そのうつぼの気が変ってきたのを、すぐに見ぬいたのか、追いかけるように正門坊がささやいた。

「なんでもないことだ、妹。七郎次の家から、白衣と松明を六人分はこびだしてくれ。それで火祭の行列にまぎれ込み、われらは山へのぼる」

「火祭の行列に」

と、うつぼも、息をひそめて、

「見つかったら、どうなさる」

「由木の社まで無事にのぼったら、あとは東光坊まで参り、そっと牛若どのを呼ぶ」

「あのお方は、夜は東光坊には居らぬそうなの」

「どこにいるのだ。覚日律師の坊か」